

カウンツの社会改造論の評価の動向

甲 斐 進 一

The Trend in Evaluations of Counts' View of Social Reconstruction

Shin-ichi KAI

はじめに

カウンツ (George S. Counts) の1932年2月の進歩主義教育協会での講演「進歩主義教育は進歩的でありうるか」(同年の著書『学校は新しい社会秩序をつくりうるか』にも掲載)¹⁾は、当時の進歩主義教育者に対して大きな影響を与えた。この講演は、1. 児童中心主義的進歩主義の批判、2. 教師の教育的、社会的改革の役割、3. アメリカ経済の民主化、のテーマを取り上げた。パールスタイン (Daniel Perlstein) は、この講演について次のように述べている。「著名なティーチャーズ・カレッジの社会学者カウンツは、彼の前に集まった児童中心主義的教育者たちの業績を賞賛した。しかしながら、同時にカウンツは、進歩主義的教師が社会秩序批判発言を拒否することによって、生徒たちが大恐慌期アメリカの悲惨さと不正義に直面することを妨げたと非難した。……彼は、民主的学校教育の保護と拡大に献身する教師たちが各生徒の批判的思考を促進し、同時に共有された民主的献身をインドクトリネートするというパラドクシカルな課題に直面しているということを、教育者たちに否応なく想起させた²⁾。しかし「カウンツは、インドクトリネーションによって彼が考えていることやインドクトリネーションが彼が賞賛する児童中心的実践と如何に折り合うかについて殆ど明らかにすることはなかった³⁾。

したがって、進歩主義教育者は、その後、民主的秩序の維持のためにインドクトリネーションを活用すべきか否かについて論争を繰り広げたが、インドクトリネーション概念やその教育的意義に関する統一の見解に至ることはなかった。

本研究は、カウンツの教育による社会改造論がどのように評価されたか、彼の理論を巡る論争が現代教育を考える上でどのような示唆を与えるか、について解明することを目指したい。

一 クラップの評価

クラップ (Elsie R. Clapp) は、論文「学習することとインドクトリネートすること」(1932年)⁴⁾で、カウンツが、社会的変革や改善に対する教育者の責任を論じたことを評価

しているが、インドクトリネーションに対するカウンツの見解には疑問を抱いている。以下、1. 学習とインドクトリネーション、2. インドクトリネーションの問題点、3. 進歩主義教育の課題、に関するクラブの所論を取り上げてみたい。

1. 学習とインドクトリネーション

クラブは、学習とインドクトリネーションとは識別されるべきものと考えている。「勿論、意識的、無意識的インドクトリネーションは、疑いなく生じる。われわれが、子どもたちの衝動へ反応し、子どもたちの経験を選択、活用し、状況や周囲を整備する際に、子どもたちを条件づけるかもしれない、否確かに条件づけるという事実は、そのような活動が教育機会になることを示している。しかし、何かカウンツの提案は子ども自身の学習と経験を軽んじている。……教師たちは、もし、彼らがまた生活と学習で成長し、発達しているなら、彼らの最高の努力によって、子どもの世界での子どもの成長と発達とに参加できることを知っている。……われわれ自身が学習している時、われわれはけっしてインドクトリネートしていない。……児童中心学校のまさに誤りは、インドクトリネーションの誤りと異なる。これらの学校は子どもが世界の中で生きていることを忘れ、子どもの社会的成長と生活を過剰単純化し、看過した。インドクトリネーティングも生活を知性化し、状況を過剰単純化する。インドクトリネーティングは、成人と条件の影響を強調することによって子どもを忘れてる」⁵⁾。

約言すれば、クラブは、学習とインドクトリネーションとは全く異なった企てであると考えとともに、生活し、学習し、活動する過程が極めて革命的であり、インドクトリネーションに重点をおくカウンツの立場は理解しがたいと唱えている。

2. インドクトリネーションの問題点

クラブはインドクトリネーション自体がもつ問題点を次のように指摘している。「インドクトリネーションは、社会的個人としての子どもの能力の実現の角度から条件を計画するのではなく、よりよい社会的条件が如何に生起させられるかについての成人のわれわれ自身の観念の角度から、条件を計画する。われわれが、この変化する世界で生きる子どもに意識的に刻印することになるこれらの観念は、われわれの予言能力を超越した条件に参与するであろう。そのような実践は、問題である。われわれ成人、社会——そのイデオロギー、習慣、実践、その満足な行為と残酷な行為——に対するカウンツの糾弾は、この点を表示している」⁶⁾。したがって、クラブは、進行中のインドクトリネーションに対抗して、インドクトリネーションによって対処するカウンツの方策は、自己矛盾であると考えている。

3. 進歩主義教育の課題

クラブは、進歩主義教育が社会問題を無視し、社会問題について十分な情報をもっていないことについては、カウンツの指摘を容認している。「われわれは、子どもが積極的に学習し、生活するとき、彼にとって可能な社会的成長を発見できるとのみ考えてスタートした。われわれは、われわれの努力を主に子どもたちの一つの教室と私立学校の改革に制限するという誤りを犯した。カウンツの歓迎される挑戦の一つの結果は、すべての場所と

階級——農夫、工場労働者、芸術家、男女事業家、有閑階級、労働者——のアメリカの子どもたちを教育する事業に入り込む教育者として、われわれ自身の社会的責任についてわれわれを説得することであるであろう。誰もどの集団からわれわれの指導者たちが生まれるかを語れない。……多分、カウンツ教授の挑戦は、われわれが生活している社会的条件を変革することに参加する教育者としてのわれわれの責任をわれわれが受け入れるよう説得するかもしれない⁷⁾。クラブは、この方策を、デューイ (John Dewey) に依拠して以下のように論じている。「デューイは、社会的条件について学習する最善の方法は、社会的条件に関して何かをなし始め、その間に学ぶことである、という事実を明らかにした。……純全たる生活の問題での知識の有益性によって知識をテストすることは、かつ、われわれ自身のコミュニティへ完全に参加するわれわれの意欲によって社会理論をテストすることは、われわれ自身のための最善の教育である。……

もし、われわれが——そして子どもたちが——われわれのコミュニティの生活を今改善するためにそこへ共に参入するなら、われわれはそれを修正し、それによってわれわれ自身を修正できるかもしれない。……デューイは、環境はミリュー (milieu) であり、媒介物である、という。われわれは環境を変革し、それを変革する際にわれわれは変革される。この企てを誰がインドクトリネーションと呼ぶことができるか⁸⁾。

したがって、クラブは、進歩主義教育が、社会問題に取組み、社会変革を目指すことの必要性は認めるが、その方策として、インドクトリネーションではなく、コミュニティ活動へ参加する学習を提唱しているということができる。

二 ムースの評価

ムース (Elizabeth Moos) は、カウンツの講演に根本的に賛意を表している。しかし、カウンツの次の文言「もし、生活が平和で、平穩で、大問題によって妨害されないなら、われわれは幾分かの知恵の指導に従って、子どもの本性へわれわれの注意を集中できるかもしれない。しかし、現実の世界に直面して、われわれは僅かな瞬間も社会的場面からわれわれの目を移すことはできない⁹⁾」には異議を唱えている。それは以下の理由による。「小学校において、われわれは、子どもの本性から社会的状況へ焦点を変更すべきでない。近年、情緒的、精神的成長のための基礎は据えられており、この仕事は特定の社会的状況に従属させられるべきでない。……それはカウンツ博士のプログラムを実現するために、放棄されるべきでないし、放棄される必要はない。われわれの問題は、子どもが、孤立した個人としてではなく、社会の統合されたメンバーとして機能するよう援助することである¹⁰⁾。

換言すれば、ムースは、社会的場面に留意することが、子ども不在のプログラムになってはならないと警告している。したがって、ムースは進歩主義教育が次の課題に取り組むことによって、カウンツの要請に応ずることができると考えている。

1. 「進歩主義学校への入学許可は、人種、皮膚の色、階級に関係なく子どもの個人的特性に基づくべきである¹¹⁾。

2. 産業の利益追求動機に通じる競争は排除されるべきである。社会的動機が個人的動機に取って代わるべきである。

3. 社会科学に対処する教師たちは、彼らの訓練の一部として経済の原理に十分通じることと、現在の動向を把握すべきである。

4. 「われわれは、若者が青年になったとき現実が冷酷であるとしてもその現実から保護されることができないことを理解して、社会的プロジェクトをわれわれの周囲の問題に関連づけるよう努力すべきである」¹²⁾。例えば、ロシアの実験を当然含む重要な世界の動向を、われわれの成熟した生徒たちが学習し、確認することを奨励すべきである。

5. 各学校の教員の一ないし二名は、教員スタッフによって選ばれたある組織、例えば進歩主義教育協会によって設けられる新しい経済問題検討部門の活動に積極的に参加する時間を与えられるべきである。類似のプランが、保護者のなかでももたれるべきである。

ムースは、このようなプランによって、若者の価値の中心が物質的なものから精神的なものへ、彼の野心が個人的肥大の職業からアメリカン・ドリーム（多くのコモン・マンが豊かな、高貴な人生を送りうる社会のビジョン）を達成する仕事へ向かうことになり、彼が現在の社会的慣習に順応することに抵抗することになるであろう、と確信している。したがってムースは、カウンツの提案がアメリカン・ドリームへの重要なステップとなる、と評価している。

三 ギアの評価

ギア (Ellen Windom Warren Geer)¹³⁾は、進歩主義教育者が共通してインドクトリネーションを実践した過去の教育を非難し、経済戦争、失業、金融の破綻のような社会的条件を嘆いているが、これらの社会的、経済的問題に次世代が対処する最善の方策に関しては、見解を異にしていると考えている。彼らは以下の方策の選択に直面している。

第一は、子どもたちに教育者の信ずる社会的理論をインドクトリネートする方策である。

第二は、「子どもたちの年齢水準に適した問題についての判断のための十分な機会とオープン・マインドの決定力を彼らに与える経験を彼らのために提供する」¹⁴⁾方策である。この立場は、「現在の社会秩序の欠陥のために無政府主義的になることなく、同様に、十分なケアリング体制を有していないために自由放任的態度でその社会秩序を容認することなく、また子どもたちが出会うものによって失望させられることもなく、完全な、思慮深い個人として、現在の社会秩序の中で生き、その秩序を変革せねばならないことを子どもたちが悟るよう援助する」¹⁵⁾ことを意味している。ギアは子どもたちのオープン・マインドを擁護することに成功した学校について次のように述べている。「そのような学校の子どもたちは、賢明な判断を行うことが如何に困難で、判断を行う前に問題の全側面を研究することが如何に重要であるかを知っている。彼らは、彼らの教師たちの意見が他者の意見と異なること、またどの様に異なるのかを知っている。彼らは、自分たちの意見を打ち立てることを奨励されるが、しかし、同時に生活とより密接に接触するようになるとき、その意見を変革し、改善することを欲するかもしれないことを悟るよう奨励される。とりわけ、彼らは（彼らの教師たちが彼らに信ずるように語るもののためではなく）何らかのよりよいプランの長所を理解する準備ができていて、自分たちが固く信ずるもののために戦う必要を十分認識している。

これらの学校は、オーストリッチのように、砂の中に彼らの頭を隠していない。それら

は現代文明の当惑させる発展に後れをとらないことの重要性を悟っている。したがって、現代の事象について集団討論の夕べを開いている。そこでは、親と教師が共にソビエトについて、自己統制的インドを創造するガンジー (Mohandas K. Gandhi) の試みについて、あるいはわれわれ自身の国家的、経済的計画についての当否を検討している。そのような夕べの論議は、翌日の午前中の学校プログラムに先立つクラス討論の時間に検討されるのみならず、生徒たちの家庭の晚餐時の談話でも検討される」¹⁶⁾。

ギアは、第二の方策を支持している。その理由は、インドクトリネーションが、現在十分と思われる社会理論といえども、急速に変化する社会で子どもが成人になるまでには時代後れになっている可能性があることに対処できないことと、事実についてのオープン・マインドの認知能力を育成できないことによる。したがって、ギアは、カウンツのいう、支配的社会理論のインドクトリネーションに対抗する民主主義のためのインドクトリネーションの方策を容認しない。

四 モーランの評価

モーラン (George K. Morlan) は、1932年の論文「プランニングのパラドックス」¹⁷⁾で、ロシアの教育を批判することを通して、インドクトリネーション批判を展開し、結果的には、カウンツの立場を批判している。以下モーランのインドクトリネーション批判を考察したい。モーランは、われわれが生存するために、共通に必要なものを計画し始めねばならないという理由で、最近プランニングが絶望を回避する方策になったことを認めている。しかし、プランニングは、個人主義、個人的創意、自由を浸食する恐れがあるとともに、次のようなインドクトリネーション擁護論をも生みだしている。

「計画された社会はプランニングを成功させるためにインドクトリネーションを必要とする。

人びとがインドクトリネーションを信頼するか否かにかかわらず、社会的プランニングまたは実験において、人びとの態度、心理が結果を決定することは認められねばならない。すべての社会的プロジェクトにけると同様に、人びとの協同が伴う場所で、人びとは同じように考え、感じる必要はないのか。インドクトリネーションはこれらの共通の欲求と理想とを創造するのに必要でないのか」¹⁸⁾。カウンツが、『アメリカへのソビエトの挑戦』(1931年)¹⁹⁾で、社会の大きな進歩は科学者の冷静な凝視のみでは不可能であり、信仰、熱意を必要とすると語ったことは上記の視点を支持するものである、とモーランは考えている。

換言すれば、インドクリネーション擁護論は次のように展開される。「もしわれわれの公益事業王と強力な既得権者が世論を彼らの好みに形成することを許されるなら、経済的プランニングは、禁酒法と同様に成功できない——実際試みられることさえできない。プランニングに好意的なインドクトリネーション、計画的なプロパガンダが必要とされるであろう。戦争期間と同様、不都合な批判は強制や社会的圧力によって抑圧されねばならないであろう」²⁰⁾。

ロシア人は、アメリカの大抵の人びとと同様に、個人主義、国家主義、愛国心、宗教、資本主義の経済的優越性の古いインドクトリネーションに対して、対抗的インドクトリネーションが必要であると考えている。

これに対してモーランは、批判的立場から以下のように述べている。「進歩主義教育者は、批判に内在する暗示の力を通してのみならず、批判が人びとの独力の思考を援助すると信じているという理由からも、批判によって虚偽の信念の力を妨害するであろう。進歩主義教育者は、普通人の英知を信じている。進歩主義教育者は、真理が十分に吟味されることによって失うものは何ももっていないと信じている。すなわち、進歩主義教育者は、もし人びとが事実の全側面を観察し、思考するよう解放されるなら、彼らは彼らの批判的能力によって、真理と完全なものの共通の受容に至るであろうと信じている。……インドクトリネーションは運動を引き起こすことを援助するが、必ずしも正当な方向へ向かわせるとは限らない。……インドクトリネーションを通しての公的感情の統制は危険な武器である」²¹⁾。

したがって、モーランは、アメリカにおいてロシアと異なった基礎の上に必要な協同を生み出すことを考えている。「われわれは、われわれの批判的態度を保持するけれども、われわれの共通の困難を解決するために協議し、計画に関して同意し、それを試すことによって、インドクトリネーションのディレンマを回避することになると思われる。絶え間ない精査と批判はわれわれが正しい方向へ進んでいるという安全弁であるであろう。プランを試しながら進む意欲によってプランは正しい方向へ進むであろう。

今日まで、人びとを真に英知的にする企てはなかった。なぜなら、われわれはわれわれの生活のすべての面——出版、説教、学校の間——でインドクトリネーションによる被害を受けたからである。

学校は、論争的な社会的主題を論ずることの抑圧から解放されるべきである。あらゆるところで、より十分な、自由な論議を行うべきである。そうすれば、人びとが次第に協同的に思考することが可能になるであろう。われわれは、インドクトリネートされた意見が事実の全側面をわれわれが考察し、われわれが十分思考することを妨げるという事実によって、今日意見が一致しない。学校を解放すべきである。すなわち、論争的な社会的主題を学習し、論議し、それらに対処する自由を与えてほしい。そうすれば、われわれは、共通の企てに向かって何らかの前進を遂げることができるであろう」²²⁾。

約言すれば、モーランは、学校や社会でインドクトリネーション、プロパガンダが実践されている実情に対抗するために、新しいないし異なったインドクトリネーションを実践する立場を容認することなく、批判的思考によって対処することを提唱している。モーランにとって、インドクトリネーションは、批判によって動じない盲目的熱意を生みだすものである。モーランはカウンツを直接批判することはなかったが、明らかにカウンツ批判の論述を展開したといえることができる。カウンツにとって、批判的思考や民主主義のためのインドクトリネーション、インポジションは成立しうるが、モーランにとって、インドクトリネーションは反民主的方法であり、反民主的人びとを生みだしうるにすぎないものであった。両者は、インドクトリネーションの捉え方に関して大きく立場を異にしているといえることができる。

五 コーの評価

コー (George A. Coe) は1933年にカウンツの『学校は新しい社会をつくりうるか』の書

評²³⁾で、カウンツの子どもの成長の現実の洞察、あるいはアメリカの公立学校状況理解を評価している。この著で、カウンツは、進歩主義者が自由な人格としての子どもに注意を集中しているが、社会的目的の論議が十分でなく、意図的ではないとしても、現状に子どもを適応させることに終わっていることを批判している。進歩主義者が社会的目的論を欠いているのは、学校が明確な社会的政策に献身することがインドクトリネーションないしインポジションになることを彼らが恐れていることによる。カウンツはこの点について進歩主義者に次のように異論を呈している。「私は、すべての教育がインポジションの大きな要素をもっている、教育の事例のまさに本質においてこれは必然的である、社会の存在と進化はインポジションに依存する、インポジションは結果として極めて望ましいものである、教育者によるこの事実の率直な受容は主要な専門的義務であるという命題を支持する用意がある」²⁴⁾。カウンツに対してコーは次のように述べている。「社会の存在はインポジションに依存する。すなわちわれわれはインポジションと非インポジションのいずれかの選択ではなく、よりよいインポジションとより悪いインポジションのいずれかの選択のみが可能である。“インポジション”と“インドクトリネーション”が社会と教育におけるこの必然的な要素のための最善の可能な用語であるか否かは問われるかもしれない。カウンツはそれらを用い、用語の使用そのことがよくないことであることを妨げるために、それらにより意味を付与している。……いずれにしても、進歩主義教育者への彼の挑戦は、論議（幾人かのものは論議を論争と呼んでいる）をスタートさせた。しかしながら、これらの用語の使用が彼の問題をどの程度まで解明するかを考える課題が残されている」²⁵⁾。カウンツは経済的領域での真の民主主義への教師の加担を要請している。コーはこの点について次のように理解している。「われわれの経済的資源のすべてを、特権階級ではなくわれわれすべてのために役立てねばならない。この点で、現在の葛藤は二つの和解不可能な力の間でのそれである。教師に中間のコースを進むことができると考えさせないようにすべきである。さらに、われわれの直面する選択は、個人主義と集合主義との間ではなく、二つの形態の集合主義の間である。すなわち、一方は民主的なものであり、他方は封建的精神、少数者への奉仕に寄与するものである」²⁶⁾。コーは、この立場を学校による特定の変革の促進ではなく、客観的に事実に対処した結果と言うカウンツの主張に留意している。コーはカウンツの立場が多くの問題を伴うことは認めているが、否定的論評は行っていない。したがって、インドクトリネーション、インポジションという用語の意味について以外、コーはカウンツの見解を擁護する姿勢を示しているといえることができる。

六 カレンの評価

カレン (Horace M. Kallen) は、インドクトリネーションに関して、カウンツとほぼ同様の見解を有している。カレンは次のように述べている。「時代は、学校を訓練し、インドクトリネートする。学校は若者を訓練し、インドクトリネートする。誰もこれを回避できない。インドクトリネーションは、普遍的現象であり、固有のものであり、最も進歩主義的な学校で成長した生徒でさえ、最も保守的な学校で成長した生徒と重要な点で異なる。……すべての教育はインドクトリネーションであり、他の何物でもない。したがって、二つの種類の教育の相違は技術ではなく教材にある。正しい方法ではなく正当なドクトリン

が悪い教育とよい教育、反動的なものと進歩主義的なものとを識別する。正当なドクトリンをインドクトリネートすべきである。そうすれば世界は救われる。

時代が必要とする正当なドクトリン、真の正説は、今日まで生まれ、産業経済が要求する集合的形態に改正された“アメリカン・ドリーム”である、とカウンツ氏は誠実な、情熱的な雄弁さで論じている²⁷⁾。

しかしカレンは、カウンツの立場を以下のように批判している。「インドクトリネーションが生み出す悪は、あるドクトリンをそれと対立するドクトリンへ交代することによって回避されることはできない。……

多分、進歩主義教育の指導者たちもまた惑わされた。確かに、彼らの性格、訓練の軟弱さのすべて、彼らの研究と方法の誤りのすべては、十分に明らかである。確かに誤りは宥赦されるべきではない。しかし、過去と関係を絶つ彼らの勇氣は非難されるべきでないし、教育における新しい方法を探究する彼らの大胆な縁の下の努力が軽視されるべきでない。少なくとも、彼らは彼らの教育的全てを欺瞞的な以前の結論に賭けなかった。……少なくとも、彼らは単にドクトリンをインカルケートすることだけを目指すことなく、英知を育成し強化することを目指した²⁸⁾。

カレンのいう英知は、同意の原理に対立するものである。「英知は疑いの中で誕生し、探究、識別、選択、テストによって成長する。英知にとって、ドクトリンは信じるべき“真理”ではなく実践すべき理論であり、ドクトリンはそれが何から形成されるのか、それがどのように見え、どのように響くかによってではなく、それが達成するものによって正当化されるべき道具である。ドクトリンを他のどのような基礎によって賞賛することも、教会、国家、学校が実践し続けているように、道具の実体化を実践することであり、道具を偶像に変更することである²⁹⁾。

さらに、カレンは次のように続ける。「インドクトリネーションが不可避のものであるなら——人間がいやしくも人間であるべきなら、人間は何かを信じなければならないので、インドクトリネーションは不可避である——インドクトリネーションは、すべてのドクトリンの相対性と偶然性、ドクトリンの選択への依存性、われわれが英知と呼ぶ選択の過程とパターン、のインドクトリネーションと捉える方がよい³⁰⁾。カレンは、科学の方法のインドクトリネーションのみがこの要件を満たすと考えている。その理由は「科学の方法のインドクトリネーションが、ドクトリンの正当性がテストされることのできる方法のインドクトリネーションとなると考えられるからである³¹⁾。

したがって、カレンは、科学の方法とみなしえないマルクス主義やファシズムによって変革されたアメリカン・ドリームのインドクトリネーションを批判し、理性の生活の実践を育む科学が実践しているような自由の信仰のみをインドクトリネートすることを容認している。

教育は必然的にインドクトリネーションであり、インドクトリネーションのもつ弊害を回避する唯一の方策は、科学の方法のインドクトリネーションである、というのがカレンの立場とすることができる。カウンツと同様、極めて広義にインドクトリネーションの意味を解釈する立場であるが、科学の方法以外のインドクトリネーションをよい意味には認めないことと、カウンツの経済的領域の民主主義論をマルクス主義、ファシズムによって変革されたアメリカン・ドリームとして考慮に値しないと評した点で、カレンはカウンツ

と立場を異にしている。

結 語

本稿は、カウンツの主に1932年の『学校は新しい社会秩序をつくりうるか』に表明された彼の教育による社会改造論に関する当時の評価の動向を考察した。進歩主義教育者が子どもに関心を集中して社会問題への対応が不十分であるというカウンツの指摘は、多くの評者に支持されている。しかし、その方策として、インドクトリネーション、インポジションに訴えるカウンツの主張は、ムースとカレン以外の評者によって批判された。ただし、ムースはインドクトリネーションの問題に触れないことによって、暗にカウンツを批判しているとも考えられる。カレンの場合は、教育とインドクトリネーションとを一体であると捉えているため、インドクトリネーションそのものを批判していないが、カウンツの経済的民主主義論のインドクトリネーションは容認しない。したがって、社会改造の方法論としての民主主義のためのインドクトリネーションの見解は、大部分の進歩主義者によって否認されたといえることができる。この点については他の機会でも検討した³²⁾。

進歩主義者は、社会改造の方法論として、インドクトリネーションに代わりうるものとして何を考えているのか。活動的学習の実践、オープン・マインド、批判的思考の育成を通してそれを目指そうとしたといえることができる。この場合、取り上げる教材はどのようなものか。カウンツのアメリカ社会の分析は全評者に容認されているわけではない。例えば、カレンはカウンツの立場をマルクス主義、ファシズム的色彩をもった民主主義論と評価している。当時のカウンツは、ソビエトやイタリアの実践をレッセ・フェールにとって代わりうるものとみなしていたために、そのような評価は、デューイによっても行われている³³⁾。しかし、カウンツの社会分析が容認されないとすると、真空の中でオープン・マインド、批判的思考の育成は不可能である。カウンツも言うように中立的な社会観はあり得ないとすれば、教師による社会分析が一つの仮説として生徒たちの前に提示されることは必要であろう。生徒たちには仮説を絶対視することなく批判、吟味することを要請することによって、オープン・マインド、批判的思考の能力を育成することは可能となるであろう。したがって、社会の具体的問題の解決策を教師と生徒たちが共に批判的に吟味することが教室場面での社会改造の教育となるということができ、カウンツの言うインドクトリネーション、インポジションの活用の姿勢は容認しがたいと考えられる。

注

- 1) G. S. Counts, "Dare Progressive Education Be Progressive?" *Progressive Education*, Vol. 9, No. 4, April 1932. G. S. Counts, *Dare the School Build a New Social Order?* (The John Day Company, 1932).
- 2) D. Perlstein, "'There is No Escape... from the Ogre of Indoctrination': George Counts and the Civic Dilemmas of Democratic Educators," in Larry Cuban and Dorothy Shipps eds., *Reconstructing the Common Good in Education* (Stanford University Press, 2000) p. 51.
- 3) *Ibid.*, p. 52.
- 4) E. R. Clapp, "Learning and Indoctrinating," *Progressive Education*, Vol. 9, No. 4, April 1932.

- 5) *Ibid.*, p. 270.
- 6) *Ibid.*, pp. 270–271.
- 7) *Ibid.*, p. 271.
- 8) *Ibid.*, p. 271.
- 9) *Op. cit.*, “Dare Progressive Education Be Progressive?” p. 259.
- 10) E. Moos, “Steps toward the American Dream,” *Progressive Education*, Vol. 9, No. 4, April 1932, p. 264.
- 11) *Ibid.*, p. 264.
- 12) *Ibid.*, p. 264.
- 13) E. W. W. Geer, “The Courage to Keep an Open Mind,” *Progressive Education*, Vol. 9, No. 4, April 1932.
- 14) *Ibid.*, p. 266.
- 15) *Ibid.*, p. 266.
- 16) *Ibid.*, pp. 266–267.
- 17) G. K. Morlan, “The Paradox of Planning,” *Progressive Education*, Vol. 9, No. 5, May 1932.
- 18) *Ibid.*, p. 341.
- 19) G. S. Counts, *The Soviet Challenge to America* (John Day Company, 1931).
- 20) *Op. cit.*, “The Paradox of Planning,” p. 342.
- 21) *Ibid.*, pp. 342–343.
- 22) *Ibid.*, p. 343.
- 23) G. A. Coe, “Dare the School Build a New Social Order?” *Religious Education*, Vol. 28, No. 2, February 1933.
- 24) *Op. cit.*, *Dare the School Build a New Social Order?*, p. 12.
- 25) *Op. cit.*, “Dare the School Build a New Social Order?” p. 115.
- 26) *Ibid.*, pp. 115–116.
- 27) H. M. Kallen, “Can We Be Saved by Indoctrination?” *Progressive Education*, Vol. 11, No. 1, 2, January–February 1934, p. 57.
- 28) *Ibid.*, p. 60.
- 29) *Ibid.*, p. 61.
- 30) *Ibid.*, p. 61.
- 31) *Ibid.*, p. 61.
- 32) 拙稿「カウンツのインドクトリネーション論の評価の動向」(『日本デューイ学会紀要』第43号, 2002年).
- 33) J. Dewey, “Discussion of ‘Freedom, in Relation to Culture, Social Planning, and Leadership’” *The Later Works*, Vol. 6, pp. 142–143.

(人間関係学部 人間関係学科)